

大震災後の子どもの「PTSD」の一症例を目にして

先に当HP記事「大震災と子どもの『PTSD（心的外傷後ストレス障害）』」を案じていたが、ドキュメンタリー番組「遠きところの復興～見えない傷を抱えて～」の中で、10才の少年の症例が紹介されていた。

津波の時、少年は母の運転する車で避難していたが後続の数台後まで津波に飲まれ、辛うじて母子は助かったが、避難場所までの途中に「助けて！」という声も聞いていたので、「僕は助けて上げられなかった…」と気にかけているよう。

避難所で余震の度に過呼吸やパニックを起こすようになり、診療内科に通院し治療を受けている。

箱庭を使った心理療法では、「死体！、死体！」と人形を砂に埋めたり、ミニカーを並べて砂をかけ、「どうして車に砂をかけるの？」と聞かれると、「津波にやられたの…」と応える。

仮設住宅に移ってからも情緒不安定な状態は続き、退行現象（赤ちゃんがえり）も見られ、遊びに外で出ることも少なくなったが、同じ仮設住宅の友だちができ、ようやく友だちと外で遊ぶことも増えてきたよう。

母親は、津波で家も仕事も失ったこれからの生活の不安の中、自身の心も折れそうになるが、「息子の心の傷を一日も早く癒したい」と自らを奮い立たせている。

マスコミ報道では震災後の子どもたちの笑顔が多く紹介されているが、恐らくその笑顔の陰に隠れた、濃淡はあろうが「心の傷」を抱えている子どもたちも多いものと推察する。

番組では他に、生きる希望を探している高齢者の姿として、津波で夫を失い自分を責め続ける60代の女性と、アルコール依存が危ぶまれる70代の男性も紹介されていた。

また、この女性と男性に寄り添うスタッフの様子を通して、「こころの復興」を願いもがく被災者に寄り添い続ける心のケアの支援チームの活動も紹介されていた。

支援チーム・リーダーの精神科医は、被災者が自らの心の内を表出し自らの心の問題を整理するお手伝いのために、長期的な傾聴の寄り添いと時間を問わない生活の見守りの支援が必要という。

ふと思うに、この少年のように、津波に流されいく人を目にし、助けを求める叫びを耳にしているだけに、「あの時、自分は助けられなかった…」という、「心の傷」というよりも自ら「心の荷」を背負ってしまった人もいるだろうから、従来のPTSD症状への対応・支援とは異なる側面が加わるような気がするのだが…。